

## 小児外科における出生前診断の現況

(分担研究：新生児外科的疾患に関する総合的研究)

野口啓幸、高松英夫、秋山 洋

池ノ上克、鮫島 浩

**要約：**最近3年9カ月間に経験した新生児外科疾患についてアンケート調査を施行した。回答がえられた110例中出生前に超音波検査を施行した症例は83例で、平均3.8回の検査がなされていた。この検査にて22例(26.5%)になんらかの異常所見があり、そのうち8例は retrospectiveにみると疾患を特定することが可能であり出生前診断症例とした。既に出生前診断がなされていた10例にこの8例を加え計18例が、この期間における出生前診断症例で、新生児外科疾患症例の13.8%であった。

**見出し語：**出生前診断、新生児外科疾患、超音波検査

昭和59年4月以降62年12月までの3年9カ月間に鹿児島大学付属病院小児外科及び鹿児島市立病院周産期センターにおいて経験した新生児外科症例についてアンケート調査による出生前診断の現況を調査した。

同期間における外鼠径ヘルニア、肥厚性幽門狭窄症等を除外した130例が新生児期早期に治療を必要とするいわゆる新生児外科症例であった。

そのうち既に入院時出生前診断がなされて搬送された10例を除き、残り120例について、その分娩施設に対し出生前診断に関するアンケート調査を行った。回答は110例についてえられ回答率は、91.7%と高率であり、その結果は、か

なり正確に現況を反映しているものと思われる。

(図1)

回答を得られた110例中出生前に胎児に関するなんらかの検査を行った症例は83例(75.5%)で、超音波検査が全例に、また超音波検査にて異常を認めた3例に対して更に胎児造影が施行されていた。(図2)

超音波検査施行回数は、1回が最も多く22人であるが、かなりの症例に対して複数回の検査が反復されており最高は13回で、平均検査回数は3.8回であった。(表1)

超音波検査所見では、異常所見なしとされた症例が61例(73.5%)であり、この中には仙尾

鹿児島大学付属病院小児外科

鹿児島市立病院周産期センター

部奇形腫、臍帯ヘルニアなどの外観状異常があり超音波によってその所見をとらえ易いと思われる疾患も含まれていた。何らかの異常があったものが22人(26.5%)であった。(図3)

異常所見の内訳は、IUGRのみが7人と最も多くついで羊水過多6人、胃胞拡張が2人で、以下IUGR+胎児輪郭不明瞭、羊水過多+臍帯ヘルニア、胃胞不明+羊水過多、臍帯ヘルニア、水頭症、腸管拡張、腹腔内多発嚢胞の所見が、それぞれ1例づつであった。

これらの異常所見を呈した胎児の出生後診断名を表2に示した。IUGRの7人は高位鎖肛、ヒルシュスプリング病、小腸閉鎖、汚溝外反+髄膜瘤、横隔膜ヘルニアと様々な疾患が含まれていた。羊水過多は、食道閉鎖症が5例、高位鎖肛が1例であった。IUGR及び羊水過多の所見については正常の妊娠経過でもみられる所見であるが、このような所見が存在するときには外科的疾患の存在を念頭におき反復検査が行われるならば更に診断率は向上すると思われる。胃胞拡張の2例は十二指腸閉鎖症であり胃胞不明+羊水過多の1例は食道閉鎖症であった。腸管拡張、腹腔内多発嚢胞、水頭症、臍帯ヘルニア、臍帯ヘルニア+羊水過多の症例についてはそれぞれ回腸閉鎖、胎便性腹膜炎、髄膜瘤+水頭症、臍帯ヘルニア+髄膜瘤、臍帯ヘルニア+食道閉鎖症であった。尚、羊水過多、水頭症、臍帯ヘルニア+羊水過多の所見を認めた1例づつに胎児造影が施行されているが、それぞれ食道閉鎖症、髄膜瘤は出生前に診断されておらず我々の症例に関しては、胎児造影は必ずしも有効な診断手段とはなっていなかった。表2の右側の8症例についてはその超音波検査所見より疾患

を特定することが可能でありretrospectiveにみて出生前診断症例とした。

鹿児島大学付属病院小児外科及び鹿児島市立病院周産期センターに入院時すでに出生前診断がなされていた10例にこの8例を加え計18例が、この3年9カ月間の出生前診断症例であった。この中には他の産科施設において出生前診断がなされ当院産科へ母体移送された症例が2例含まれている。この18例を疾患別にみると、以前の報告にもみられるように消化管閉鎖症例が多く、外表奇形がこれに次ぎ、胎便性腹膜炎、卵巣嚢腫も比較的出生前診断がしやすい疾患のように思われる。

(図4)

出生前診断の時期は、25週未満の症例はなく25週から30週未満が4例、30週から35週が4例、35週から40週が9例と最も多く40週以降が1例であり妊娠後期に診断されたものが多かった。

各年毎の出生前診断率をみると明かに増加してきており昭和59年8.0%、60年3.2%であったものが、61年23.9%、62年18.2%と最近2年間についてみるとほぼ5人に1人の割合で出生前診断がなされている。この数値は昨年厚生省班会議にて報告された61年の外科系13施設の出生前診断率とほぼ同様の数値であった。(表3)

本県における出生前診断の現況を調査する目的で行った今回のアンケート調査の結果、妊娠中の胎児検査が行われていない症例は少なく多くの症例では数回にわたって施行され個人病院にまで広く普及していることがうかがわれる。しかしながら妊娠の有無や胎児各部の計測目的で行われること

がほとんどであり、疾患診断を目的とした場合には時間をかけて詳細に検査を行わなければならないが頻度の少ない外科的疾患の診断のために妊婦全体に反復検査を行うことは不可能であり、この点に

(図1) アンケート調査数

新生児外科症例	130例
出生前診断症例	10例
アンケート調査依頼	120例
回答あり	110例 (91.7%)

(図2) 出生前検査内容

検査あり	83例 / 110例 (75.5%)
超音波検査	80例
超音波検査+胎児造影	3例

(表1) 超音波検査施行回数

1回・・・22人	8回・・・4人
2回・・・6	9回・・・1
3回・・・15	10回・・・1
4回・・・7	11回・・・2
5回・・・8	12回・・・1
6回・・・10	13回・・・2
7回・・・3	

平均 3.8回

(図3) 超音波検査所見

異常所見なし	61例 (73.5%)
異常所見あり	22例 (26.5%)

(表2) 超音波検査異常所見と出生前診断

所見	出生前診断	数	所見	出生前診断	数
IUGR	高位鎖肛	1	胃腸拡張	十二指腸閉鎖	2
	ヒソコクツ病	1	胃腸不明+羊水過多	食道閉鎖	1
	小腸閉鎖	3	腸管拡張	回腸閉鎖	1
	右側外反+腹膜炎	1	腹腔内多発嚢胞	胎便性腹膜炎	1
	髄膜瘤ヘルニア	1	水頭症	髄膜瘤+水頭症	1
羊水過多	食道閉鎖	5	臍帯ヘルニア		
	高位鎖肛	1		臍帯ヘルニア+髄膜瘤	1
IUGR+胎児輸送不明症			臍帯ヘルニア+羊水過多		
	臍帯ヘルニア+腹膜炎	1		臍帯ヘルニア+食道閉鎖	1
計		14	計		8

(図4) 出生前診断症例

(昭和59年4月～62年12月)

食道閉鎖症	1
食道閉鎖症+高位鎖肛	1
食道閉鎖症+臍帯ヘルニア	1
十二指腸閉鎖(狭窄)	3
小腸閉鎖	3
胎便性腹膜炎	3
高位鎖肛	1
髄膜瘤+水頭症	1
髄膜瘤+臍帯ヘルニア	1
臍帯ヘルニア+脊椎湾曲	1
卵巣嚢腫	2
計	18

(表3) 出生前診断率

59年	2 / 25 (8.0%)
60年	1 / 31 (3.2%)
61年	7 / 30 (23.3%)
62年	8 / 44 (18.2%)
計	18 / 130 (13.8%)



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:最近3年9ヵ月間に経験した新生児外科疾患についてアンケート調査を施行した。回答がえられた110例中出生前に超音波検査を施行した症例は83例で、平均3.8回の検査がなされていた。この検査にて22例(26.5%)になんらかの異常所見があり、そのうち8例はretrospectiveにみると疾患を特定することが可能であり出生前診断症例とした。既に出生前診断がなされていた10例にこの8例を加え計18例が、この期間における出生前診断症例で、新生児外科疾患症例の13.8%であった。